

25. 第4学年口腔外科学の系統講義におけるチュートリアル学習の導入について(東日本歯学会第22回学術大会 一般講演抄録)

著者名(日)	武藤 寿孝, 金澤 香, 柴田 考典, 有末 眞, 平 博彦, 永易 裕樹, 奥村 一彦, 村田 勝
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	23
号	1
ページ	137
発行年	2004-06
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00008873/

【結果および考察】正規の系統講義の時間外にもかかわらず、学生の参加はそれぞれ96%、94%であり、授業評価においても好評であった。また、開発した上下顎分割モデルは、上下顎base、上下顎前歯部、両側臼歯部の計8ブロックからなり、上下顎baseを大学備品として準備することにより、実習者は実習で必要な部分のみを購入・準備すればよくなる。これにより、学習者の技術修得

度に応じ、必要なブロックの交換のみで繰り返し実習を行うことが可能となり、より確実な教育目標への到達が可能となった。

さらに、本モデルを採用する大学が増えることにより、各ブロックの量産効果が期待され、実習生の経済的負担を軽減できると考えられる。

25. 第4学年口腔外科学の系統講義におけるチュートリアル学習の導入について

○武藤 寿孝, 金澤 香, 柴田 考典, 有末 眞,
平 博彦, 永易 裕樹, 奥村 一彦, 村田 勝
(北海道医療大学歯学部口腔外科学教室)

【目的】第4学年における口腔外科学系統講義の目標は、口腔外科学に関連する幅広い知識を獲得とともに、自らの疑問に対し適切な回答を探索し、発見し解決する態度、習慣、および技能を身につけることである。しかし、講義形式による情報伝達には限界があり、後者の問題発見、情報検索、コミュニケーション、および発表などの能力を身につけるためには、チュートリアル学習の導入が必須と考え、試行したので報告した。

【方法】まず、全員にチュートリアル学習の目的、方法について解説した。ついで、1グループ4～5名となるよう20グループに班分けし、各グループに異なった課題を4月中に提示し、1名のチューターを配置した。チューターは講師以上の7名が務め、それぞれ2～3グループを受け持ち、予めstory makingについて演習を行い準備した。チュートリアル学習は講義時間外に行い、発表は11月中旬からの10コマをあて、1グループ発表20分間、質疑応答15分間、チューターのコメント5分間とした。グループ発表の評価は学生による相互評価とし、5段階のレーティング・スケールからなる質問10問、自由

記載欄、および100点満点の総合的評価点3項目からなる評価票を作製し、発表開始前に評価票を配布し実施した。なお、評価票は記名とし、相互評価票の提出をもって出席とした。

【結果および考察】チュートリアル学習の成果発表に対する学生の出席率は高く、最低でも60%を超えており、相互評価票における自由記載欄の記入率も常に40%以上と格段に高く、本演習は学習意欲の向上に寄与すると考えられた。

学生による相互評価のうち100点満点の総合的評価点では、それらのグループごとの平均点が85～60点の間に分布し、おおむね妥当な評価と考えられ、相互評価を形成的評価に採用できると考えられた。

また、学習目標の達成度を100点満点で自己評価させたところ、49%が100～80点を、41%が79～60点を、10%が60点未満を示し、さらに、68%の学生が、次年度の学生にこのチュートリアル学習を継続することについて賛意を示しており、大多数の学生が何らかの達成感を得ているものと推測された。

26. 本学歯学部附属病院地域支援医療科活動報告 第3報

○松原 国男*, 越野 寿**, 平井 敏博**, 吉野 夕香***
(*歯学部附属病院地域支援医療科・**歯学部歯科補綴学第1講座・***歯学部附属病院事務部)

本学歯学部附属病院は地域からの要望に応えるべく、平成12年11月に「地域支援医療科」を新設し、訪問歯科診療室所属の歯科医師と各科・部署の担当者が診療にあたる体制を整備した。

今回は、平成15年1月から11月末までの「地域支援医

療科」としての活動について報告する。

1. 訪問歯科診療の実績

訪問診療を実施した患者数は135名（平成13年同期間：257名）であり、延べ訪問診療回数は995回（平成13年同期間：716回）であった。